

思えば遠くへ

薬学部
薬学科

教授 小田 和明



男子高校(群馬県は今でも公立高校は基本的に男女別学)での毎日は受験勉強に明け暮れ「暗黒の時代」のはずが…それはそこ、どんな環境でも劣等生は密かに集い、他愛も無いことに至福を見だし、夢のような楽しい3年間を過ごしてしまいました。結果はやはり、家族から離れ東京で1年間の暗い浪人生活となります。

そんな悪夢から解放された、私19歳の春、父の「学生運動と女性に気をつけて」



クラブ像と19歳の春

の声に送られて晴れて北海道の地で大学生活を始めました。理類という、成績次第で進学する学部が決まるという大切な時期に、授業そっちのけで、軟弱な(?)硬式庭球部に入り朝から晩迄、テニスの初歩「壁打ち」に励みました。今思い返してみると、中学、高校と剣道部に所属し、男の汗と臭いに満ちた薄暗い武道場で練習に明け暮れた反動だったのでしょうか。動機は不純でしたが、ここで私は「生涯の伴侶」ならぬ「刎頭の友」と出会うことになります。

なんとか滑り込んだ薬学部では4年生に有機化学系講座を選択しました。そこでまさに実験にハマってしまいました…私の大学は国試合格率50%程度でしたが、先輩の「なんとかなるさ…」を愚かにも信じて、それこそ寝食を忘れて卒業研究に没頭しました。まさに画期的な薬が出来ることを夢見て。その流れから就職は製薬企業の研究所に、教授のコネで合格させて頂きました。

私の学生時代

今、大学の教壇に立たれている先生たちは、学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。今回は小田 和明教授と白石 淳教授のお二人に、当時の様子を語っていただきました。

思い出の詰まったアパート

看護福祉学部
臨床福祉学科

教授 白石 淳



私は、共通一次試験(現、センター試験)の第1回目を受験しました。「共通一次世代」です。現在は、教職課程において教育学を主として担当していますが、大学のスタートは、四国の高知大学理学部地学科です。地質用のハンマーを持ち、フィールドで岩石を叩いていました。その後、理科から教育経営、教育福祉に方向が変わり、学部・大学院等と、異



アパートのおばちゃんと仲間。左から2番目が私

なる5つの大学に通いました。

高知は坂本龍馬の地で、そこで私は、広大な太平洋を眺めながら少しだけ成長しました。ここでは、一番の思い出である私の生活の場「アパート」の話をします。キャッシュカードの使い方も知らない中で一人暮らしの始まりでした。住み家は、下宿のようなアパート。そのアパートは工事現場の事務所のような建物で、外に付けられた鉄の階段をタンタンと昇り、2階へ。2階の外の廊下に4つの各部屋のドアが並び、ドアを開け、靴を脱ぐと6畳間のみの部屋。ベッドは、酒屋で調達した黄色のビール瓶ケースを並べ、その上に布団を敷き完成。机は、夏でもこたつ。トイレ、キッチンはもちろん部屋の外にあり、階の共同です。風呂は、階段を降りて、10メートル程先の大家さん宅の庭にある風呂場(小屋?)、タオルと洗面器を持って走る。薪で沸かした湯へ。今でいうルームシェア(?)でしょうか。このようなアパートで過ごしたのが、私の学生時代です。それが最



東北大学との定期戦いわゆる「東北(トンペイ)戦」にて右は私が私

本当に良い時代でした。

卒業が迫り、講座の助教授(私の前任者町田實教授)から「開学する大学の薬学部に助手としてこないか?」とのお誘いを受けました。理由は「君より優秀な学生はたくさんいるが、この忙しい薬学部で体育会系クラブを卒業迄全うしたのはすごいよ」でした。「評価されたのはそこか…?」の思いも若干有りましたが、就職内定先にお詫びの連絡を入れ、日夜実験に明け暮れる本学での助手生活が始まりました。なん

と、それから教員生活40年、町田教授の後任として講座をお預かりし、あと2年余りで無事(?)定年を迎えます。まさに「思えば遠くへ来たものだ…」です。



田んぼのなかの思い出が詰まったアパート

も楽しかった。学科やアパートの仲間と、誰かの部屋にাগり込み、ビールとポテチ、日本酒と魚、飲・食を買い込んで、夜中までテレビを見ながら、レコードを聴きながら、ギターを持ち込みながら、しゃべったりと…自由にダラダラ。そのような中で、大学での学びの外に、大人の世間を少し垣間見ながら多くのことを学び、少し大人に近づきました。その仲間や下宿のおばちゃんとは、今も変わらず仲良く続いています。このアパートには、私の思い出が一杯詰まっています。

今は、学生のみなさんにとって、医療大学がこの街が、思い出がたくさん詰まった場所になるように願っています。私はそのお手伝いが少し出来たらいいなと、密かに思っています。